# ノーベル文学賞

札幌市医師会
在宅療養支援診療所　ヘルスケアクリニック光
上出　利光

例年秋になると今年のノーベル文学賞は誰に授与されるか？　村上春樹氏が今年こそは受賞するか？と、気になってしまう。しかし、発表前日に村上作品に縁のある地まで出掛けて発表に一喜一憂するほどでもない。思うに昔から本とは縁が深かった。中学入学時に父から与えられたのが広辞苑で、それ以来改訂ごとに購入している。暇な時に目的もなくページを開き、読んでみるのも面白かった。

受験勉強の合間には、日本文学全集を乱読した。高校３年生の時に旭川市の初代姉妹都市交換留学生として１年間イリノイ州の田舎街で過ごす機会があり、英文学の授業（ディケンズの作品等）で辛酸をなめ、英英辞典や英語語源辞典もたまに開くようになった。語源辞典は面白い。最近中東情勢が喧しくなっているが、Turkにはトルコ人という意味の他に、乱暴者、悪、トルコ皇帝、イスラム教徒との意味で使われた時期もあり、当時のキリスト教徒からの偏見も垣間見える。

Complementは完成させる、補足する、そしてcomplimentはお世事、敬意の意味で使われているが、ある時期には世事ということでは、complement=complimentの時期があったようだ。人間関係や国際関係も、良好な関係を維持するためには言動に気を配り、お世事とは言わないまでも、少し言葉を添えて、補いあう精神が必要であろう。

高校生の時に、米国に滞在した1967 ～ 1968年は、公民権運動や学生運動が盛んであった。当時流行していた歌が、ボブ・ディランの『ライク・ア・ローリング・ストーン』だ。軽快なロック調のリズムも新鮮だったが、詩が哲学的であり、それ以来彼の曲をよく聞くようになった。まさか、村上春樹氏を差し置いて、2016年にノーベル文学賞を取るとは思いもよらなかった。歌手のボブ・ディランがノーベル文学賞なら、ジョン・レノンが生きていれば、ジョンこそが受賞に価すると信じている。断じてグループとしてのビートルズではない。

さて、帰国した年の1968年には川端康成が受賞しているが、個人的には川端康成よりは、谷崎潤一郎が好みだった。

ちょっと話が逸れるが、最近苗字の由来をテーマとするテレビ番組があるが、なかなか深いものがあり、気に入っている。iPadが日本で販売されるといち早く手に入れ、若者に先んじてFacebookの利用を始めた。ここで、日本の上出さんのグループ化を試みた。小生は上出と書いて（うえで）と読む。（かみで）と読むのが一般的である。（うえで）は、東京以北では我が家系のみである。数年かけて約25家系の（うえで）さんを見つけて友人関係を結んだ。テレビ番組に投稿し、（うえで）の由来について調査をお願いしようと思ったが、家族に却下されてしまった。

さて、話を元に戻そう。一昨年は日系英国人のカズオ・イシグロ氏がノーベル文学賞を受賞したが、彼の作品を５編ほど購入し読んでみたが、あまり好みではなかった。通常は休日に一気に読み終わってしまうのだが、彼の作品は断続的に中断し、読み終わったのは、秋になっていた。唯一少し気に入ったのが、『The Remains of the Day（日の名残り）』で、『忘れられた巨人』は最悪であった。失礼ながら、苦行に近い１年をかけてイシグロ氏の作品を読み終えたのに、昨年は選考委員会関係者がMe Too騒動の渦中に巻き込まれ、選考無しとなった。これほどの伝統と権威ある委員会での騒動である。迷惑な話である。しかし、この騒動が無かったとして、村上氏は受賞できたであろうか？　『1Q84』は、寝る時間を削って読んだ。ちょうど中国の大学を訪問していた時に、大学の書店に彼の作品が山積みにされていた光景を忘れもしない。それ以降も『色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年』『女のいない男たち』『騎士団長殺し』等読んだが、段々と読み終えるのに時間を要するようになっている。睡眠時間を削ってまで読み続けたいという思いに至らない。ニューヨークタイムズの書評でも『騎士団長殺し』は酷評されたようだ。

新しい元号で迎える今年こそは、ノーベル文学賞の選考が再開され、受賞作家の作品をのんびり楽しめる日本であって欲しいものである。

願わくば、村上春樹氏の作を――。